

[成果情報名]ニホンナシ「幸水」の根域制限栽培圃場における台木別収量と果実品質

[要約]ニホンナシ「幸水」における定植5年目から4年間の1樹当たりの収量は、ホクシマメナシ台とマメナシ台がヤマナシ台より多く、果実の糖度はヤマナシ台がホクシマメナシ台、マメナシ台よりも高い。

[キーワード]ニホンナシ、幸水、収量、果実品質、台木

[担当]佐賀県果樹試験場・落葉果樹研究担当

[代表連絡先]電話 0952-73-2275

[分類]研究成果情報

[背景・ねらい]

本県のニホンナシの栽培では樹勢低下とそれに伴う収量低下が問題となっているが、これまで県内で利用されてきたヤマナシ台にかえて新たな台木を導入することで生産性を改善できる可能性がある。これまで台木ごとの幼木期の樹体生育、開花特性を明らかにしてきたが、ここでは「幸水」における収量と果実品質の違いについて明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 根域制限栽培におけるホクシマメナシ台およびマメナシ台の1樹あたりの収量は同程度で、着果開始から4年間継続してヤマナシ台よりも多い(図1)。
2. 根域制限栽培における8年生樹の10aあたりの収量は、ヤマナシ台が1.8t、ホクシマメナシ台が2.5t、マメナシ台が2.4tである(データ略)。
3. 着果開始以降、果実重は徐々に大きくなり、4年目でマメナシ台の平均果実重は他の台木よりも大きい(図2)。
4. 果実の糖度はホクシマメナシ台、マメナシ台よりもヤマナシ台が高い(図2)。

[成果の活用面・留意点]

1. 本成果はニホンナシ「幸水」の台木の選定のための基礎資料とする。
2. 本試験の供試樹は露地根域制限栽培圃場(幅2m、深さ20cm、樹間2.25m、列間4m)において2016年11月に2年生「幸水」の苗を定植し、2本主枝仕立てで栽培した。4年生(2018年)までは未着果で管理し、5年生(2019年)から着果させて管理した。側枝あたりの着果程度は同程度で管理し、変形果、小玉果は随時摘果した。
3. ホクシマメナシ台とマメナシ台はヤマナシ台に比べて幼木期の樹体の生育が旺盛で樹冠拡大が早いため、1樹あたりの着果量が多い。

(URL:https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00380591/3_80591_205654_up_k575mkbl.pdf)

[具体的データ]

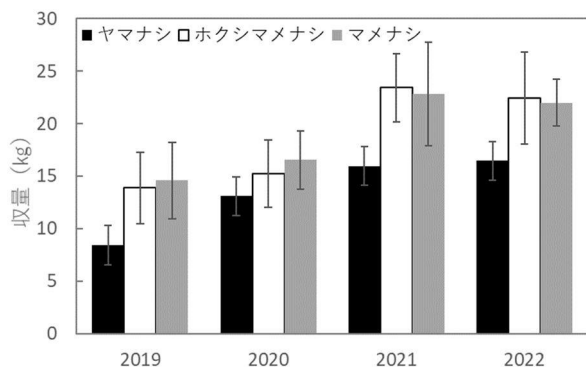
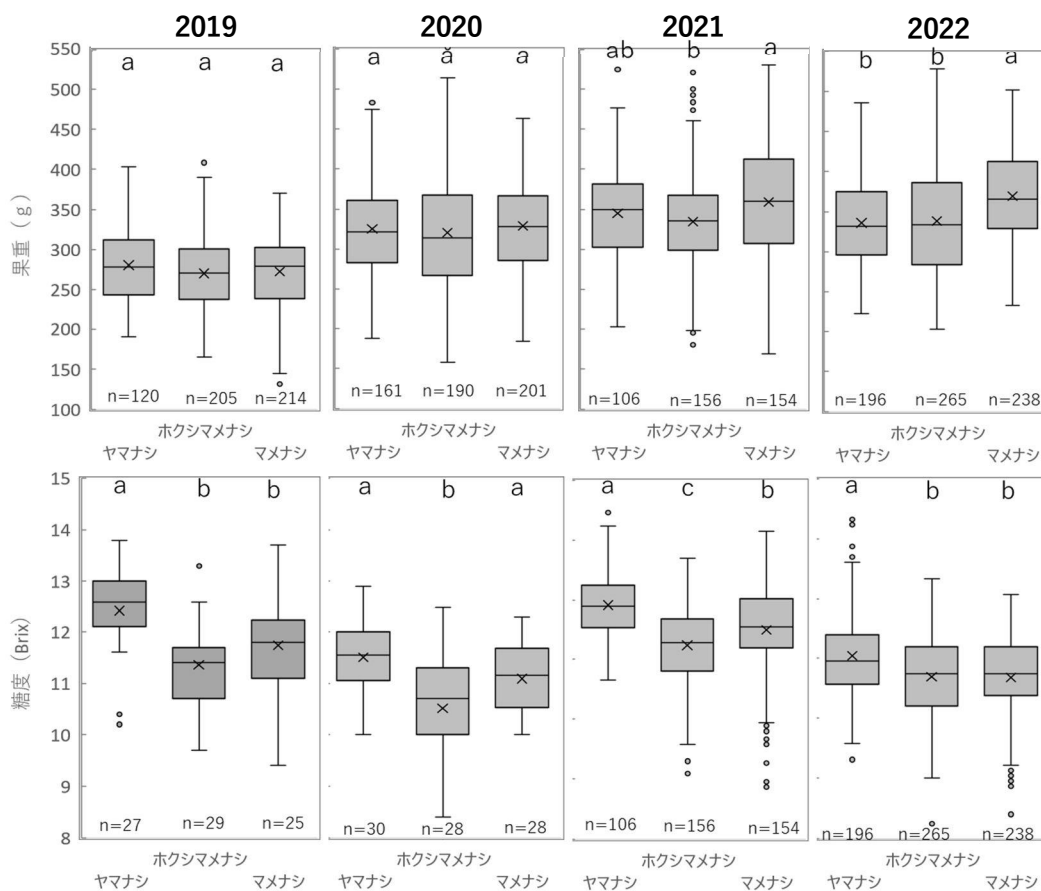


図1 台木の違いが根域制限栽培における「幸水」1樹あたりの収量に及ぼす影響



注) Tukeyの多重検定により、異英字間に5%水準で有意差あり

図2 台木の違いが根域制限栽培における「幸水」の果実品質に及ぼす影響
上：果実重 下：糖度 (2019-2022)

(佐賀県果樹試験場)

[その他]

予算区分 : 県単

研究期間 : 2019~2022 年度

研究担当者 : 加藤恵 (佐賀県農業技術防除センター)、児玉龍彦、原口俊輔 (西松浦農業振興センター)

発表論文等 : 1) 加藤ら (2023) 佐賀県研究成果情報

https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00396835/3_96835_280686_up_wnwp2u4.pdf